

# 兎年を迎えて



専務取締役兼編集責任者 中野 富雄

## うさぎの年

月の中で餅をつく兎、皮をはがれた因幡の白兎、長い耳と赤い目でおとぎ話の中に出てくる可憐な動物であるが、過去には農作物や林木に害をあたえるので、兎狩りをして捕え、兎汁に舌鼓みを打った思い出もある。

兎は、明治末期より昭和初期にかけて、我が国では軍用又は輸出用として、農村副業に飼養され、昭和10年頃には全国で600万頭に達したが、現在では僅かしか飼育されていない。利用の主体は毛、皮であるが、肉も淡泊で、鶏肉に似て居り、兎を一羽二羽と数えるほどである。

兎は草のみでも飼うことが出来る。良質な毛皮や肉を生産するためには若干の濃厚飼料も必要であるが、飼養方法も飼養設備も簡単であり、繁殖力も旺盛であるから、山野草や農作物副産物を利用して、緬羊などと共に日本的畜産物として見直す必要があるのではないかと、兎年を迎えて考えて見たわけである。

## 食糧と飼料

今年はその兎のように平和な年であってほしいが、政局や物価の安定は六難しさを増し、畜産業

界は、畜産物価格の不安や飼料の値上げが重なって、国際的な影響は避けられそうにもない。石油の不足もさることながら、世界中で毎日20万人も増加を続けている人口を養う食糧をどうするか、低開発国では現在でも4億人の栄養失調者がいるという。先般ローマで世界食糧会議が開かれ、食糧の増産、備蓄、後進国への援助などが議決されたが、自分の国の食糧は成るべく自分の国で確保することが要請される時代となった。

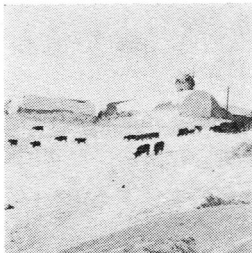
大量の食糧を外国からの輸入に依存している日本は、稲作の生産制限を行なって間もないが、一転して食糧の国内自給度を高める方向へとすすまなければならないことになってきた。

そこで問題になるのは食糧と飼料の関係である。

食糧のうち澱粉質食糧として米は概ね自給の域に達しているが、蛋白質食糧として水産資源が制約されて来た現況からは、畜産物の増産確保が従来以上に必要となって来た。ところが畜産の増産を支えている飼料用穀物がすべて輸入品であり、その価格が鰻登りに上昇していることや、この飼料用穀物が低開発国では人間の食糧として使用されていることが問題である。鶏や豚は全くこの輸入飼料穀物を消費して蛋白食糧となっている。草が飼料の主体である筈の牛も、特に肉牛ではフィードロット方式と称して全く飼料穀物により肥育されている。それは外国に多額の金を支払い、国際的には食糧価格を高くし、畜産農家にとっては生産コストにはねかえって、畜産危機の言葉が叫ばれる原因となっている。考えさせられる問題である。

もっと国内の飼料資源を増産、確保して真の畜産物自給率を高める方法がないのだろうか。過去長年に亘って草地の造成をすすめて来たのはそのためであるが、少なくとも反芻動物である羊や牛については、牧草、飼料作物の国内における増産体制を拡大強化して、真の国内自給率を高め、併せて畜産経営にもプラスとすることが出来る筈である。

## 目次



新春を迎えた牧場風景

雪印優良耐暑性牧草品種

表紙…①②

◎年頭のごあいさつ

五十嵐 清…… 1

□兎年を迎えて

中野 富雄…… 2

□ソルゴー・スノーデント・シコクビエの活用

森山 武…… 4

□寒冷地における自給飼料の増産

兼子 達夫……10

□野菜の優良種雪印がおすすめる

話題の品種 中原 忠夫……14

## 飼料自給の可能性

畜産物価格の適正化は勿論必要であるが、畜産危機を叫び畜産農家を不安と絶望に陥れる前に、畜産物需給の将来性と国内飼料自給度向上の可能性に、もっと真剣に取り組まねばならぬ。最近省力化の風潮から、機械化は良いとしても過大となり、飼料の生産から離れて購入に依存し、生産費の増加を見ている面が少なくないが、もっと地についた飼料の生産自給を、山野の草地開発、田畑における集約な飼料作物の増産、稲藁など副産物の高度利用を含めて、一人一人が工夫し、国の施策もここに重点を指向すべきである。飼料用穀物の生産については全面自給は当面困難であろうから、これらはなるべく鶏、豚用に廻し、牛用の飼料穀物は最少限にしぼり、牧草、飼料作物で生産の大部分をまかないたいものだ。

事実、最近の技術は、牧草や飼料作物により相当10t以上、二毛作地帯では20t以上の生産を挙げている人が多いことを考え、まだ未開発地や低生産地、あるいは遊休水田裏作地もあることを思えば、飼料に関するかぎり自給度の向上は充分可能性がある。

### 自給飼料増産のポイント

個々の経営の中で自給飼料増産のポイントは何処か。度々言い尽されていることだが、新年に当たってもう一度考えて見よう。

(i)まず、**計画的な生産**が必要である。土地が狭ければ尚更であろう。家畜頭数に応じた年間必要量、これを生産するに必要な土地面積、季節、風土に適した飼料作物の選定と組合せ、年間を通じて毎日の給与計画、これに貯蔵計画、施肥計画、更に不足分の購入計画を加え、併せて飼料計算までやっておけば理想的である。

(ii)**地力の培養**こそ生命である。これらの作物は土地から生産する。太陽のエネルギーとこれをたくわえ地力の培養が増産につながる。堆厩肥、尿の施用、石灰投入による酸土矯正、輪作方式と緑肥利用による地力の培養、これらによって土地は軟かく、有機物や有効土壌菌が増加して、いわゆる底力が出て来ることは良く知っている処である。化学肥料一辺倒は土地を悪化し、生産費を高めるばかりだ。

(iii)**作物の選択と組合せ**も充分考える。牧草、飼料作物も近年急速に改良され、地域適作物も明確となって来た。先ず適地適作を原則とし、出来るだけ改良種を使うことだ。例えば、一代雑種、四倍体など生産力の高い品種や地力培養力、蛋白含量の多いまめ科牧草、暖地における耐暑性作物などを活用する。又、夏と冬の季節に併せた作物の

選択組合せも必要である。

(iv)**栄養生産性**を高めることも忘れてはならない。飼料として含有養分と消化率の高いことが望ましい。これらは作物の種類、収穫の適期、地力と肥培により左右される。最近の濃厚飼料の高値を補うには特に養分生産の高いものが必要である。例えば最近のデントコーン(とうもろこし)はその点で大変すぐれた品種が出来ており、実つきが良く、倒伏、病害に強い。このように実のよくついたデントコーンを適期に収穫してサイロにつめると、それは濃厚飼料に匹敵する養分を持っている。牧草についてもアルファルファなどまめ科混入割合の多い混播草を主体にして栄養生産を高めたい。

(v)**貯蔵ロスの防止**にも注意しなければならぬ。放牧や刈取り給与でも若干のロスは避けられないが、乾草やサイレージの調製では下手をすると相当な量的、養分的にロスが出る。折角の栽培管理の苦労が水の泡となり兼ねない。収かくの時期、天候、機械、設備などによるが、収かく作業、サイロの埋込作業での心くばりが最も大切である。一枚の葉、一本の茎が、一粒の米、一粒の豆に相当し、金になることを意識しなければロスを避けることは出来ない。

(vi)**老朽草地の更新**を今年こそは心掛けてすすめたい。永年牧草も経済的な最盛期は播種後4~5年である。6~7年以降は牧草も株が老朽化し、草種混生割合も悪化、地表は硬化して水や肥料、空気の流通はわるくなり、雑草もふえて草地生産力は急激に低下する。従ってこの時期に更新することが大切である。更新によって地力も向上する。牧草地全体を計画的に順を追って更新し、常に若々しい草地を維持することが草地管理のコツと言える。これは輪作にもつながることだ。いたずらに草地面積の広いことのみ執着してはならない。

以上のことは誰でも知っていることだが、労力や経費から実行出来なかったり、あるいは目の前に直ぐ買えるヘーキューブやビートパルプがあるとそちらを利用して本筋に手をつけない。これでは自給飼料の増産も畜産危機への対応も出来ない。草地造成や自給飼料の増産には国の補助事業もある。これもよく研究して充分活用し、機械化も経営面積に応じて導入あるいは共同利用方式を取り入れて、地についた自給飼料の確保を具体化したいものだ。

今年は昭和50年。終戦後30年を経て、畜産においても新しく大きい展開を見せる一つの区切りの年にしたいものである。